

KSKR HIT ニュース

No.67 Nov.2025

表紙:「鶴の橋」

鶴の橋は、古くは「猪甘津の橋」と呼ばれ、『日本書紀』に約4世紀の冬11月に猪甘津(いかいつ＝現在の東成区・生野区のあたり)に橋を架けたという記録が残っています。この記録により日本で最も古い架橋とされています。

橋は上町台地にある難波高津宮から河内・大和方面への重要な交通路をつなぐ役割を果たしていましたが、1940年(昭和15年)に旧平野川の埋め立てにより廃橋となりました。これに伴い、橋自体は姿を消しましたが、1952年(昭和27年)に当時の親柱4本を保存し、記念碑が建立されることになりました。

特集!「地域移行支援事業」前編

今、どんな生活をしている?

地域移行支援を利用して退院した方にインタビュー!

巻頭言

精神科病院からの地域移行

～一人でも多くの地域生活の実現をめざして～

大阪市こころの健康センター
安孫子 千穂

平成29年度から国の政策理念として「精神障がい者にも対応した地域包括ケアシステムの構築」が掲げられており、大阪市でも精神障がいの有無及びその程度にかかわらず、だれもが安心して地域で暮らし続けることができるよう、医療、障がい福祉・介護、住まい、社会参加、地域の助け合い、普及啓発等が包括的に確保されたケアシステム作りをめざしているところです。

私が医療看護福祉系の学生や地域の支援者に、精神障がい者支援に関する講義をする際には、迷いつつも差別偏見に基づいた隔離収容政策の歴史と今も持たれやすいマイナスイメージの存在を話しています。それは精神障がい者が抱える特有の地域課題と思えるからです。「各分野の支援者が手を携えて、本人が安心・安全に自分らしく生活できる地域に変えていこう！」と伝えています。精神科病院からの地域移行もその取り組みの一つと考えています。

現在、こころの健康センターと地域活動支援センターが連携し、精神科病院からの地域移行の推進に取り組んでいます。お互いの機能を発揮して、大阪市独自事業としての「地域生活移行推進事業」と障がい福祉サービスの「地域移行支援」を活用しながら一人でも多くの方が退院できることをめざしています。

大阪では、1997年の大和川病院事件を契機に、「社会的入院は保健福祉行政のあり方に起因するもの」と考え、退院促進や地域の支援体制の強化を柱とした取り組みが始まりました。2018年からは大阪市の独自事業として「地域生活移行推進事業」を開始しています。

地域生活移行推進事業とは、精神科病院の長期入院者のうち、病状が安定しているものの退院意欲が低い方に対し、福祉サービスの地域移行支援につなげるための意欲喚起を図る事業です。地域活動支援センターすいすいを始めとする市内の地域活動支援センターと一部の相談支援事業所にご協力いただき、退院支援を実施しています。支援を継続するなかで、この事業を利用した多くの方が「このままこの面接を続けたい」と希望され、地域移行支援の申請につながっています。

支援にあたっては、まずこころの健康センター職員が本人と面接し受託事業者につなぎ、本人の希望と状態に合った生活は何なのか支援方針を一緒に考え、実際の個別支援は事業者が実施します。個別支援では、本人の気持ちに寄り添いながら意欲喚起や外出などの活動支援等を、時にピアサポーターとも協働しながら丁寧に行っていただいています。

私は事業を通し、個別支援と同時に啓発活動も地域移行の大きな柱であると考えています。病院からは「病院はスタッフも多く安心な環境。地域で生活する方がいろいろな面でリスクがあるのでないか」「地域には受け皿がない」、地域からは「長期入院は良くない。地域で生活できている人はたくさんいる」、本人からは「退院はしたいが病院の方が慣れているし」等の声があがっており、各々が地域での生活に抱くイメージに違いがあることが大きな課題であると感じています。

こころの健康センターとしては、お互いが正しい現状を把握し、めざす方向の一致が図れるよう「伝えつなぐ」役割が今後重要になってくると考えており、お互いを知る機会となる交流会の開催や病院・地域に出向いての啓発活動等に積極的に取り組んでいます。今後とも、大阪市における「にも包括の構築」をめざした精神保健福祉施策の推進に連携・協働いただきますようお願いいたします。

目次 HIT ニュース No.67

・巻頭言

「精神科病院からの地域移行

～一人でも多くの地域生活の実現をめざして～

大阪市こころの健康センター 2-3
安孫子 千穂

・特集！「地域移行支援事業」 前編 4-10

・当事者の声No.13 「うみの中のサカナ」

梁本徳勇 11

特集！「地域移行支援事業」前編

皆さんは、大和川病院事件をご存じでしょうか。大和川病院事件は、1997年に内部告発により発覚した精神障害者への人権侵害に関わる事件です。その一因として社会的入院が問題となりました。社会的入院とは、治療の必要がないにも関わらず、地域で安心して生活できる社会資源につながらないことや家族の意向によって長期にわたって入院を続ける状態を言います。

大阪市では「精神障害者の社会的入院は人権侵害である」という認識に立ち、社会的入院を解消するために2002年より精神科病院からの地域移行支援の仕組みとして独自で地域生活移行支援事業(いわゆる退院促進支援事業)を開始しました。大阪市内には精神科の病床を持つ病院が少なく、市外遠方の病院に入院している方が多くいらっしゃいます。元々住んでいた地域から離れた場所に入院することで退院が進まず、長期入院となる要因の一つになっているのです。

精神障害者地域生活支援センターすいすい(以下:すいすい)でも2002年に事業委託を受け、職員と当事者職員(ピアサポーター)が退院促進の支援に取り組んできました。

病院で面会を重ねて信頼関係を築いていき、その後病院近隣への外出や少し距離のある外出などを通して利用される方の人となりを知りながら、少しずつ時間をかけて退院について一緒に考えます。何気ない会話を通して、ご本人の心の奥にある思いや不安を聞き取っていきます。

長期入院されている方の中には地域での生活イメージが持てないことから退院に拒否的な方もおられ、そういった方々にとっては「退院」という言葉を聞くだけでも不安に感じる場合があります。そういう時はあえて退院という言葉を使わずに、まずは安心して話が出来た関係性を築くことを意識して関わっていきます。

今回の特集前編として、すいすいの地域移行支援を利用し退院されたお二人のインタビューを行いました。インタビューには実際に地域移行支援として関わったすいすいのスタッフも同席し、入院中や退院の際のお気持ちなどお聞きしています。

インタビューの内容だけでは伝わり切らない部分も多いですが、職員との掛け合いでどんな関係性を築いてきたのかが垣間見え、とても良い時間となりました。

実際に地域移行支援を利用した方の声を聴き、社会的入院がなぜ問題なのか皆さんと一緒に考えたいと思います。





Aさん



- ・70代女性
- ・X病院に13年入院
- ・Aさんが思う自分の性格:ざっくばらんで細かいことは気にしない。
- ・Aさんから見た地域移行職員:すいすいを利用していた時の職員。とても優しくて親切、面倒見が良くて気が利く。

—Aさん、今日はインタビューに応じてくださってありがとうございます。さっそくですが、AさんがX病院に入院される前、どのような暮らしをされていたのかお聞かせください。

Aさん) 25年程前になるかな。すいすいのお風呂を利用しに行っていました。

—当時の事を知っているヒット職員も何となくAさんがすいすいに来られていたことは覚えています。食事会にも参加して下さってましたね。

Aさん) 週に1回の食事と土曜日にモーニングね。食事会はあんまり長いこと行ってなかったけど、当時お風呂のないアパートに住んでたからお風呂はよく利用していました。それと昼間は作業所へ、夕方から夜間高校へ行っていました。作業所で仲良くなった人もいました。

—Aさんはお仕事以外に好きな事をして過ごしたり趣味に没頭したり、そういう時間も持たれていましたか？

Aさん) 今はもう忘れてしまったけど、手編みで帽子を編んだりね。

—素敵なお趣味ですね！今もやってみようと思われないんですか？

Aさん) 今はもう思わないですね。最近はテレビばかり観てるね。韓国ドラマが好きでね。入院してた時は落ち着いて観れませんでした。若い時はテレビを持ってなくて観たことないからね。ここに来て初めてやから。

—入院前は作業所へ通所したり夜間高校へ通われたり、趣味を楽しんだりと充実されていたんですね。では、入院することになった時のことは覚えていらっしゃいますか？

Aさん) X病院の前にも2年程別の病院に入院したこともありまして。役所の人と兄に連れられて、入院する段取りで行ったから、仕方なしで入院したんです。X病院には13年間入院してました。入院したばかりの頃は兄が何度か面会に来てくれたけど、だんだんと来なくなって、退院したいと思ってたけど言えなかった。

—そんな経緯があったんですね。X病院に入院していた頃も地域移行で職員が訪問していましたが、その時はどんなことをしていましたか？

Aさん) コロナが流行ってるからってということで、病院の方針で外食が禁止になって、でかけても外では食べられなかった。ハンバーガーを買ってきて、病院で一緒に食べてたんです。それでも楽しみでしたね。あと、住むところを探しに出かけました。何か所も見学に行ってたけどグループホームの階段がのぼれなくてしんどくて、今のところに入居することになりました。

—ちなみに、退院されてからは好きなものは食べられましたか？

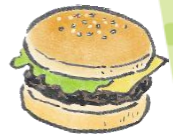
Aさん) 毎週1回だけね、餃子や焼き鳥を買って食べてます。ここの食事は健康的なメニューが多くて、それはそれでいいんだけど、やっぱりたまには好きなものを食べたいですね。あと、3か月に1回ヘルパーさんと鰻を食べに行きます。50代の頃に食べたきりで食べる機会がなかったから毎回楽しみにしてます。お刺身を買って食べるのも楽しみです。ここは生もの出ないからね。

—退院されてから楽しみもあって、ご自分の時間も過ごすことができているようで良かったです。退院が決まった時はどんな気持ちだったか覚えていらっしゃいますか？

Aさん) 入院生活ももう限界で苦しかったから、嬉しかったわ。ここの部屋を見てね、広いし、テレビや冷蔵庫も用意してもらったし、一人住まいでも嬉しかったです。入院してた時はね、お風呂もみんなで一斉に入ってすぐ出ないといけなかった。でも今はゆっくり一人で入れるし、腰も温められるので満足してます。

—そういうお話を聞くと私たちのやりがいにも繋がります。次が最後の質問になりますが、Aさんの今後の目標や夢はありますか？

Aさん) 自分の身体だけ守ってね、今と変わらない生活を続けて行きたいなって思ってます。



Aさんを担当したすいすい職員より

長期入院は人の判断力や持っている力を奪うものだと思われました。Aさんは「退院したい」という意欲はあるものの、どうしていいか、どこに退院していいのか不安に思っておられました。諸事情により、実現できないこともありましたが、今、ご自身でご自身の生活を楽しまれている様子を拝見して、とても嬉しく思っています。時々日常生活の不満も出ますが、それもまた地域生活ならではのようです。これからも「生きてて良かった。」と思える日々を送って頂けるよう微力ながら力を尽くしたいと思います。



Bさん

- ・60代男性
- ・Y病院に37年入院
- ・Bさんが思う自分の性格:優しい、お調子者、涙もろい、トークが好き、気が短い。
- ・Bさんから見た地域移行職員:ヘアスタイルと服が良い。



—Bさん、今日はインタビューに応じてくださってありがとうございます。さっそくですが、BさんがY病院に入院される前、どのような暮らしをされていたのかお聞かせください。

Bさん) コンサートを見に行ったり、調理師の仕事をしたりしてました。調理師で働いた後は、紳士服専門店で働いてました。売上がナンバーワンになったこともありますよ。

—音楽を楽しまれたりお仕事でも大活躍だったんですね。その後、Y病院に入院することになった時のことは覚えていらっしゃいますか？

Bさん) 働いていた時に、「一緒に僕のところで働かへんか」ってスカウトされたんです。甘い考えでついて行ってしまって、そこでトラブルが起こって警察が来たんです。そのままY病院に入院になりました。それが20代の頃。怖かったから入院して良かったと思いました。

—辛いご経験をされましたね。入院して怖い気持ちはおさまりましたか？

Bさん) 完璧におさまりました。でも37年入院してたから家がないんです。だから退院先もないんじゃないかなっていう気持ちの方が強かったですね。母親は亡くなって、父親も生きてるか分からないし連絡も取れないのでね。

—そんなお気持ちを持たれていたんですね。そんな中、退院したいと思うようになったきっかけは何だったのでしょうか。

Bさん) 4人部屋だったのでトークしたり、カラオケの作業療法に参加したりして楽しく過ごしていましたが、患者も職員も嫌な人はいるもんですね。嫌なことも言われました。それで、Y病院を離れたいと思うようになりました。でも、会いたい職員さんもいます。

—地域移行を利用し始めて、職員と面談や外出をしてもらいましたが、その時のお話を聞かせてください。

Bさん) CD盤買いに行きましたね。お金が足りなくて西野カナのアルバムが買えなかったのが残念だったなと思っています。ファミレスで食事したり、暑い中駅からイオンまで歩いたりね。赤色のチェック柄シャツも買って、ショッピングできて良かった。退院先を探すために出かけて、その時に回転寿司を食べました。最初はずっとY病院におってもいいかなと思ったけど、もう死ぬまで絶対行きたくない。もう二度と行けへん。

—そう思えるようになったのも、Bさんが退院に向けて頑張られたからだと思います。退院された日のことは覚えていらっしゃいますか？

部屋に初めて入った時にね、右手に大きなテレビがあったんですよ！びっくりしました。入院中は他の患者とチャンネル争いしてたからね。独り占めできるのは嬉しいです。

—退院されてからはどんな生活を送っていますか？

入院中は4人部屋だったからトークする相手もいたけど、今は一人部屋で寂しいです。食事の前後に他の入居者とトークするくらいですね。月1回ヘルパーさんと中古のCDショップに行きます。大好きな赤色のCDケースも欲しいな。テレビだったら毎週土曜日の吉本新喜劇が1番好きです。あと、ゆめくらぶに通所するようになって月1回カラオケに参加したり、他の利用者とトークしたり、やっぱりテレビ観るよりトークの方が好きだからね。ゆめくらぶも庶民的なおかげが気に入ってます。庶民的言うたらあれやけど…

—ゆめくらぶも気に入ってもらえて良かったです。Bさん、退院されてすぐにコロナになったと聞いています。年末だったので職員から年賀状の代わりにお手紙を書かせていただきましたね。

Bさん) 僕毎日読んでるんですよ。職員さんが書いてくれた手紙、毎日絶対見るんですよ。僕にとってはちょっとしたお守り代わりかな。

—職員にとってもそう思っただけで嬉しいです。Bさん、今後の目標やしたいことはありますか？

Bさん) 八神純子のコンサートにもう1回行きたいかな。あとは、変わらず過ごせたらいいですね。



Bさんを担当したすいすい職員より

Bさんと初めてお会いした日、率直に「こんなに落ち着いている人がどうして何十年も入院しているのだろう。」と思いました。Bさんと病院の外に出かけた際、「今日買っとかないと明日死ぬかもしれんから。」と何気なく言われたことがありました。ご本人にとって自由に外出できることが当たり前ではなく、また次いつ出かけられるか分からない不安からの発言なのかなと想像し、つらい気持ちになったのを覚えています。現在、日々のささやかなことを幸せに感じながら過ごされているご様子を見て、私もBさんが退院できて心から嬉しく思っています。この生活が今後も続いていけるようこれからも力になればと思います。

HITニュース編集委員より

皆さんは訪れたことがない場所へ行く時、どのような準備をされますか？

スマホで電車の乗り換えを調べたり、食事をするレストランを選んだり、行ったことがある人に事前に教えてもらう人もいるかもしれません。

休日はどのように過ごしていますか？

家族や友人と出かけたり、趣味の時間をつくったり、いつもより手の込んだ料理をつくる人もいるかもしれません。

私たちが当たり前に過ごしている日常が知らぬ間に奪われていくのが「長期入院」なんだと、インタビューを通し改めて感じました。

切符の買い方が分からない。道が分からない。スマホの使い方が分からない。お金のおろし方が分からない。化粧の仕方が分からない。

きっと日常的に利用していたら、そのような状況には陥らないと思います。生活を営むうえで必要なこと、これまでできていたことも長期入院によってできなくなってしまうのです。

また、長期入院によって奪われるものはこれらだけではありません。家族や友人と疎遠になってしまい、退院できても再会できないことも多くあります。

AさんとBさんへのインタビューを通し、自分らしく生活されていることを嬉しく思うとともに、社会的入院についての問題を改めて考える機会となりました。

しかしながら、地域移行支援事業につながることなく、治療を終えてもなお長期間精神科病院に入院し続けている方は多くおられます。冒頭でもありましたが、精神科病院での長期入院は、社会的入院と言われています。人生の大半を病院内で過ごし、限られた活動範囲で生活を余儀なくされている方が多くおられます。

日本は国際的に精神科病院の長期入院者がかなり多い国とされています。

新規の入院患者の方の退院まで要する期間は年々減少していますが、高齢で在院日数の多い患者の退院はなかなか進んでいないとされています。

次号では地域移行支援事業後編として、社会的入院を解消するためには、どのような課題があるのかを調査・整理し、解消に向けて皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

Aさん、Bさん、今回は貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。

今後もお二人が自分らしく生活していけるように応援しています。

うみの中のサカナ



ゆめくらぶの絵画陶芸教室で、海にいるサカナをイメージして描きました。

波の感じが難しかったです。この絵を見て是非涼しくなってください。

梁本徳勇

当事者の声 No.13

特定非営利活動法人 精神障害者支援の会ヒット

地域活動支援センター(生活支援型)

憩いの場、食事・入浴サービスと相談支援事業(電話・面談・訪問・情報提供等)、長期入院者の退院支援、計画相談支援事業を行っています。また、当事者活動「せせらぎクラブ」の活動拠点となっています。

□精神障害者地域生活支援センターすいすい

火～土 10:00～17:00 Tel. 06-6977-0114
〒537-0024 大阪市東成区東小橋 1-8-12

グループホーム

入居者の個別のニーズを共に確認し、医療機関等の他機関と連携しながら支援を行っています。

□グループホーム HIT

生活介護事業所

送迎や食事・入浴サービスを行っています。またプログラム活動や生産活動、等の機会を提供することでそれぞれのニーズに合わせた支援を行っています。時間に縛られずのんびりと過ごすことが可能です。

□アトリエ・IK

月～金 9:00～17:00 Tel. 06-6711-2235
〒544-0031 大阪市生野区鶴橋 2-18-11

□ゆめくらぶ

月～金 9:30～17:00 Tel. 06-7891-8084
〒544-0034 大阪市生野区桃谷 1-13-1
新栄プロパティ桃谷 2 階

就労継続支援 B 型事業所

同じ障害を持つ仲間同士、喜びも悩みも共感し合いながらそれぞれの無理のないペースで作業に取り組んだり、余暇活動を楽しんだりしています。一人ひとりが安心して目標に向けて準備をしていけるよう、医療機関や各関係機関等とも連携をしながらしっかり丁寧にサポートしていきます。またイベントへの参加など社会参加の機会も多く、地域とのつながりを大切にした活動を行っています。

□あしすと

月～金 9:00～16:30 Tel. 06-6191-7755
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町 4-16
ウエイブビル 1.2.3 階

□タスト

月～金 9:00～16:30 Tel. 06-6975-8050
〒537-0024 大阪市東成区東小橋 3-1-15
NKB ビル 2 階・4 階

□むつみ工房

月～金 9:00～17:00 Tel. 06-6773-0418
〒543-0002 大阪市天王寺区上汐 4-5-11
吉祥苑マンション 101 号

訪問事業

ヘルパーや看護師を派遣し、生活面や医療面のサポートを行っています。

□居宅訪問介護事業 ヒットハンズ

月～金 9:30～17:30 Tel. 06-6731-2300
〒544-0031 大阪市生野区鶴橋 2-18-11

□訪問看護ステーション ひっとほっと

月～土 9:30～17:30 Tel. 06-6191-7757
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町 4-16
ウエイブビル 1 階

ヒット会費納入について

会費の納入がお済でない会員の皆様は、下記の口座へお振込みをお願いいたします。同時に新規会員も大募集しております。ぜひ皆様もヒットを支えるお一人になっていただけませんか？心よりお待ちしております。

振込講座:郵便振替

講座番号:00990-4-110460

加入者名:特定非営利活動法人 精神障害者支援の会ヒット

●HITニュースみんなのご意見箱

皆様のご感想、ご意見を大切に、これからのHITニュース運営・編集の参考にさせていただきます。編集スタッフ一同、心よりお待ちしております。

※HITホームページの右下にご意見箱の入口があります。

HP:<http://www.npo-hit.or.jp>

●HITニュース当事者の声投稿募集!!

まずは、お気軽にご相談ください。

・電子メール:news@npo-hit.or.jp

・電話: 06-6977-0114

(HITニュース担当者宛)

文書・イラスト・写真など表現は自由です。文字数は800字程度、画像のサイズはご相談ください。

皆様からの投稿お待ちしております。

発行人:関西障害者定期刊行物協会

〒543-0015 大阪市天王寺区
真田山町 2-2 東興ビル 4 階

HIT ニュース

2025 Nov. No. 67

編集: 特定非営利活動法人
精神障害者支援の会ヒット
HITニュース編集部

〒537-0024
大阪府大阪市東成区東小橋 1-8-12
地域生活支援センター すいすい内

Tel. 06-6977-0114
Fax. 06-6975-9955